シリーズ

# お互いの力でまちづくり ⑥

日本ふるさと塾主宰 萩原茂裕

# 足元にある材料をハートで耕す

数年前に長野県の山あいのまちに講演に行きました。松本市と大町市の間にある池田町です。

講演会の途中で午後3時のサイレンが鳴りました。近くの工場のサイレンでしたが、どこにいても聞けるものでした。

そのとき、ふと思いだしたのが、このまちは、あのだれもが知っているてるてる坊主、てる坊主……の童謡の作詞者、浅原鏡村先生のふるさとだということでした。そこで「いやぁ、みなさんのまちは、てるてる坊主の発祥地ですよ」と言ったのです。

## てるてる坊主のまちが誕生

すると、数日たってから、地元の銀行の行員全員が、胸にてるてる坊主を下げました。それに呼応して、商工会の青年部が、「よし、てるてる坊主のメロディーのチャイムとオルゴールをつくろう」ということになりました。そうして、とうとうまちのほとんどの家で、受話器をのせるオルゴールが、てるてる坊主の旋律に変わってしまったのです。

そればかりか、やがて立派な「てるてる坊主記念館」まで誕生しました。

## 自分たちがまず愛着をもつ

## まちを知り尽くしているか

鹿児島県に枕崎という市があります。かつおぶしの名産地として有名です。

今から8年ほど前になりますが、市の有志の人たちから、「かつおぶしが売れなくて困っています。いい方法はありませんか。」と相談を受けました。「かつおぶしの産地だから、レストランや食堂、それからホテルに、かつおぶしと削り器を置きなさい。」とアドバイスしました。

つまり、どこでもそうですが、外で売ることばかりを考えて、自分たちがそれに愛着をもっていないのです。これでは市が発展する道理がありません。

それから、かつおは一本釣りの漁法ですから、「一本釣りをスポーツにしたらどうでしょう。」と勧めました。これは、ずいぶん有名になりました。そのうちに、国体にも採用されるかもしれません。

## 五月の空にかつおのぼり

まだあります。枕崎からこいのぼりがなくなってしまったのです。代わりに、まちの空には、風薫る五月、なんと、かつおのぼりが泳ぐようになったのです。

つまり、まちづくりがうまく進んでいるところは、みんなが、足元にある材料を耕し直しているのです。初めから盛んだったものは一つもありません。

文化というのは英語でカルチャー、簡単にいえば〝耕す〟ことです。あなたのまちにある、ふだん何気なく思っている材料を、ハートで耕すことが、まちづくりの一つのやり方です。

生きる町となるためには、ハートが必要なのです。

子どもたちの笑顔を大切にするまちを